

## 青森から発信！女性技術者のポテンシャルが創り出す“ミライ”

青森県 県土整備部 整備企画課\*

### 1. はじめに

この誌面をお借りして、「本県建設業が直面している担い手不足等の現状に一石を投じよう！」、「女性技術者の可能性を青森から発信しよう！」と頑張っている本県女性技術者チームを紹介したい。

青森を代表する夏まつり「弘前ねぶた祭り」の開催を前日に控えた7月31日、本県弘前市に女性技術者チームが集結することとなった。会場となった藤田記念庭園は、総面積が約21,800㎡（約6,600坪）と、東北地方においては世界遺産の構成資産の一つとして登録された平泉毛越寺庭園に次ぐ大規模な庭園として知られている。

また、今回は国土交通省から本県弘前市出身でもある土地・建設産業局不動産課長の須藤明夫氏をお迎えし、三村青森県知事、女性技術者チームが一堂に介し、本県建設業やインフラの“ミライ”を熱く語る貴重な場となった。

### 2. 基調プログラム～行政対談～

まず最初に、基調プログラムとして行われた須藤明夫氏と三村青森県知事との行政対談におけるコメント（骨子）をご紹介します。対談は、「建設業における女性技術者の役割」と「インフラで経済を回す」の2つの視点で進められた。

#### 1) 県民の危険度は約4割も上昇！（三村知事）

この15年における建設業就業者数の減少スピードは、本県の人口減少スピードを大きく上回っており、15年前は建設就業者1人当たり15.4人の県民

を支えていたものが、現在は約1.4倍の22.0人の県民を支えている計算となる。これは、災害対応等を考えたとき、県民の生命と財産の危険度が1.4倍になったとも言える。まずは、この危機的事態を理解して欲しいし、この事態を何とかしなければならない。



写真-1 対談風景（左：三村知事、右：須藤氏）

#### 2) 女性技術者の声を継続して発信して欲しい！（須藤氏）

女性技術者の細やかな気配りが現場を上手く進めるといった話や、公共施設のデザイン等に女性のセンスが光る部分がたくさんあるという話をよく聞く。ユーザーファーストの視点で、女性技術者のほうが優れている部分がたくさんあるということや、女性技術者が輝けるフィールドがたくさんあるということをもっと知って欲しい。また、女性技術者の働きやすい環境を整えるために国も精一杯応援していきたいと考えているので、ネットワークを広げて女性技術者の声をどんどん発信し続けて欲しい！

\*017-722-1111（代）

### 3) イノベーション時代の主役は女性技術者！

#### (三村知事)

今、地方はまさにイノベーション（刷新）時代に突入している！女性ならではの「きめ細やかさ」や「おもてなしの心」を活かしてインフラの既成概念を打ち破り、本県のポテンシャルを最大限に発揮させて欲しい。女性技術者が活躍できるフィールドがたくさん広がっていること、そして、それを牽引する主役は女性技術者であると信じている。

#### 4) インフラを賢く使う工夫を！（須藤氏）

今後はインフラをうまく使いこなせている地域が勝ち抜いていく時代だと言っても過言ではない。例えば、観光には交通インフラを使うわけだが、景色、食事、ショッピングなどを上手く組み合わせるといった視点、周遊ツアーを企画して県産品をどこでどの様に売り込んでいくか等、インフラを如何に有効活用するかといった視点を大事にしていきたい。こういった柔軟な発想に男女の差はなく、むしろ女性の優れたアイデアに期待している。

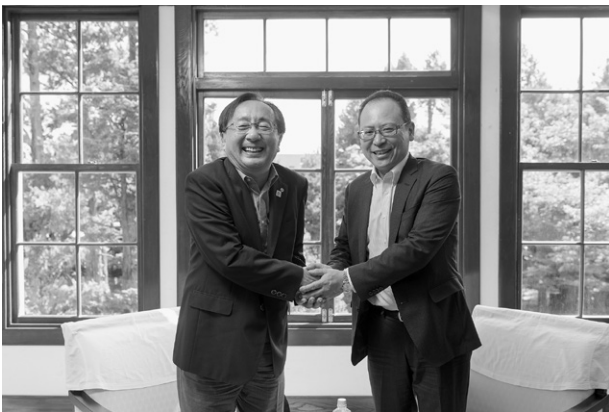


写真-2 笑顔と固い握手で終了した行政対談  
(左：三村知事、右：須藤氏)

### 3. 女性技術者チームの紹介と活動内容

次に、行政対談に引き続いて行われた女性技術者チームの活動報告の内容（骨子）を紹介する。

#### 1) 青森ドボジョきらきら推進チーム

「青森ドボジョきらきら推進チーム」（通称：ドボ

きらチーム）とは、青森県庁内の総合土木職の若手女性職員（いわゆる公務員技術者）を構成員とするチームで、発足された平成27年度以降、インターシップやキャリアセミナーへの参画、女性技術者勉強会の開催によるスキルアップ等に精力的に取り組んでいる。また、女性目線での職場環境改善にも取り組んでおり、これまで女性用作業着の導入や、女性用トイレに更衣スペースとなるフットボードの設置等の提案・実現にもつながっている。さらに、今後の展開としては県内外の女性技術者とのネットワーク形成にも目を向け、公務員技術者としてのリーダーシップ性にも配慮した活動につなげていきたいと考えている。



写真-3 女性技術者チームによる活動報告風景

#### 2) 女性建設技術者ネットワーク会議

「女性建設技術者ネットワーク会議」とは、県内建設業で働く女性が構成員となり、上述した「ドボきらチーム」と同時期である平成27年度に発足したチームであり、発足以降、業界の意識啓発のためのセミナーや、会社の垣根を越えた女性技術者のネットワーク推進に精力的に取り組んでいる。また、建設業を志す女子学生のためのロールモデルとしてPR冊子の作成・配布に取り組むなど、業界のイメージアップにも一翼を担っている。現在、約50名程で活動しており、今年度は新たにイメージアップ動画の作成に参画するなど、本県建設業界に新しい風

を吹かせるための取組みにも着手している。

### 3) 女性チームの新たな“カタチ”「あおりなでしこ」発進!

「担い手不足」、「人材確保」等と言った課題は全産業共通であり、これまでは個別の産業毎に個別の取組みを展開するスタイルが主流となっていた。この構図に新たな風を吹き込むため、県内で働く異業種の女性がタッグを組み、昨年度結成されたのが「あおり女子就活・定着サポーターズ（通称、あおりなでしこ）」である。そもそも、女性活躍機会の拡大、県内定着、人口増加等といった視点で考えたとき、「全産業が目指すべき目的は一緒」という本質に着目したのもである。この取組みに建設業で働く女性技術者も参画しており、今年度からは首都圏で開催する移住・定住イベントに合同参画するなど、事業種別の垣根を越えた新たな連携スタイルにも取り組んでいる。



写真-4 異業種で構成される「あおりなでしこ」メンバー

### 4) 女性技術者が描く“ミライ”を現実のものに!

建設業には男性社会という固定概念や男性本位の仕組み等が未だに少なからず介在するせいか、自由意見交換の場では女性技術者が直面する苦労も垣間見ることもできた。ただ、彼女たちがこれまで取り組んできたことは決して無駄ではないと確信している。これまで、ユーザーファーストの視点でたくさんの児童や学生、同じ悩みを持つ女性達に優しく、丁寧に、そして真正面から向き合ってきた彼女たちだ

からこそ、エンドユーザーである県民が真に望んでいる“ミライ”を正確に捉えているのではないだろうか。また、担い手確保や意識啓発等といった活動の成果は一朝一夕で得られるものではないが、若い彼女たちが丁寧に、大切に蒔いた“ミライ”の種を、確実に芽吹かせる責任が社会にはあると考える。そのためにも、産学官連携で取り組んでいる上述を含む様々な取組みを継続するとともに、リーダーシップ役の行政が最強の応援団ともなるべきだと考えている。



写真-5 快晴の藤田記念庭園にて（集合写真）

## 4. おわりに

そもそも、「女性活躍社会」という言葉があること自体、働くことにおいて何らかの男女差が介在するという証拠なのかもしれない。現在進めている取組みの本質とは、「女性活躍」という言葉のない社会を目指すことでもあり、日本の基幹産業である建設業においてこそ、それを実証することが求められているのではないだろうか。取組みの真価が問われていると言っても過言ではないだろう。

最後に、今回の意見交換が実り多いものとなったことに対し、須藤課長様をはじめとする国土交通省関係者の皆様、弘前市役所の関係者の皆様、会場スタッフの皆様に深くお礼を申し上げますとともに、皆様方の益々のご健勝とご活躍を祈念して結びの言葉といたします。